

独宇宙研究所の小松所長「宇宙の歴史理解したい」 暗黒エネルギーの謎に迫る

2012/12/4付 | 日本経済新聞 朝刊

米テキサス大学や独マックスプランク宇宙物理学研究所などは、宇宙を加速膨張させている正体不明の暗黒エネルギーの謎解明に挑む「H E T D E X」と呼ぶ観測計画を進めている。米トムソン・ロイター社が選んだ2011年に世界で最も引用された論文でも知られる小松英一郎マックスプランク宇宙物理学研究所長（38、写真）に狙いなどを聞いた。

——何を観測するのか。

「テキサス大の直径約10メートルのホビーエバリー望遠鏡（世界最大級の光学望遠鏡）で、103億～120億年ぐらい昔、宇宙の大きさが今の5分の1から3分の1だった時代の銀河100万個を観測。観測データを解析し、暗黒エネルギーの進化を追っていく。これまで予備実験をしており、14年から3年間取り組む」



——暗黒エネルギーの何を調べるのか。

「暗黒エネルギーの密度が一定なのか、時間とともに変化しているのか、例えば昔に比べて今は増えているのかなどを調べる。正確に分ければ、未来に宇宙が原子までバラバラに引き裂かれるビッグ・リップが起きるかどうか分かる。（日本の国立天文台のすばる望遠鏡で暗黒エネルギーを調べる東京大学などの）『すみれ』計画にも研究所として参加したい」

——最終的にはどんな謎の解明を目指すのか。

「宇宙の誕生から現在までの歴史を理解したい。その障害になるのが暗黒エネルギーの正体と、（宇宙が初期に急激に膨張した）インフレーションを何が引き起こしたのか。もしかしたら、その仕組みは同じかもしれない」

NIKKEI Copyright © 2013 Nikkei Inc. All rights reserved.

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。